

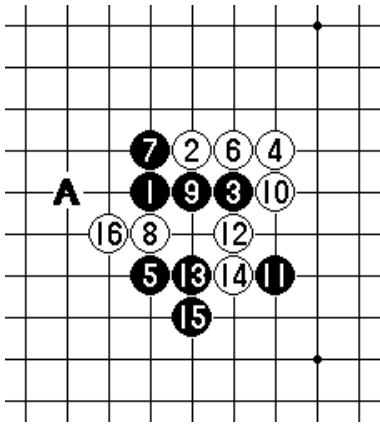
連珠っておもしろい

九段 河村典彦

● 第137回 ●

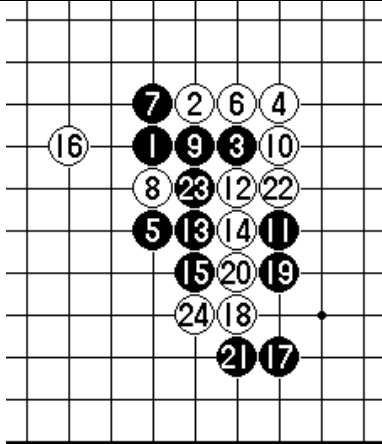
■ 恐ろしい研究

今回はA級を優勝した汪さんの作戦を紹介したい。次の図はA級での館一汪戦である。恒星から白4を打ち、黒5で流星に戻した。以下黒15まで進んだ時、白16を間違えて黒勝ちとなった。館君はこの作戦を知らなかったようで、白16はAが絶対となる。



ここで注目してほしいの

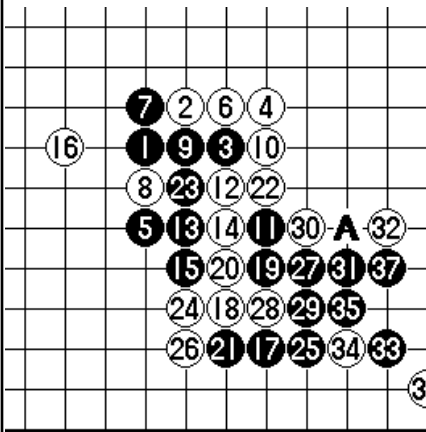
は盤端関係である。流星では黒3が天元の位置にあるので図で左辺に2路広い。なるほど、ここに作戦があったのだろうと推測した。そして局後検討で大まかな研究を聞き、家で詳しく調べたら、これは恐ろしい作戦だということが分かった。ぜひ実戦で使ってみたいと思っていたら、ちょうど新春大会で使う機会（対井上七段戦）に恵まれた。では、その棋譜を紹介しよう。



白4、黒5を打ったら井上君は？という顔をして白16を取った。井上君もA級リーグの局は知っていたよう

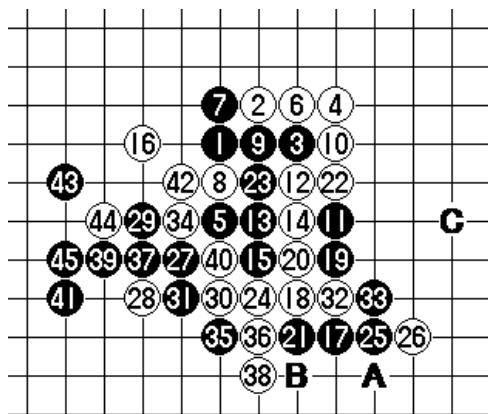
で、ただ現地にいた私の方がかなりアドバンテージがあった。白16は絶対止めで、これで何が作戦？と聞いているのが良く分かった。続いて黒17と引き出せば白24までは絶対の応酬で、過去にもここまで良く打たれていた。この後攻めても白に絶対止めがあり黒の攻めが頓挫する、というのが常識であった。

ところが、である。ここから黒は攻める。まずは黒25と三を引く。ここは引いた方に止めるのが絶対で、逆止めは譜のように黒27



にミセ手を打って以下勝てる。これを28、27と打ってしまうと、白Aで先手を取られる。白28をAなら黒四追いがある。

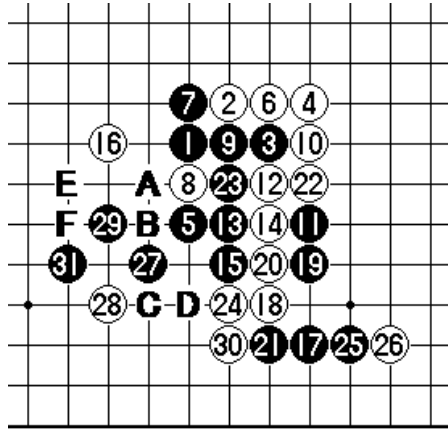
従って白26は反対止めで絶対で、ここで左辺に目を向けるのが継続手である。それが黒27から29（左図）。この手を見ると、なるほど左辺が広い。これはかなり攻めが続くと思われた。



実はここが第一の関門で、例えば白30と34と打つと、黒35、37と引いて上下で勝

ちが出る。白36を反対なら黒A、B、38で四三となる。（注意したいのは先に黒Bは白Cで逆転）

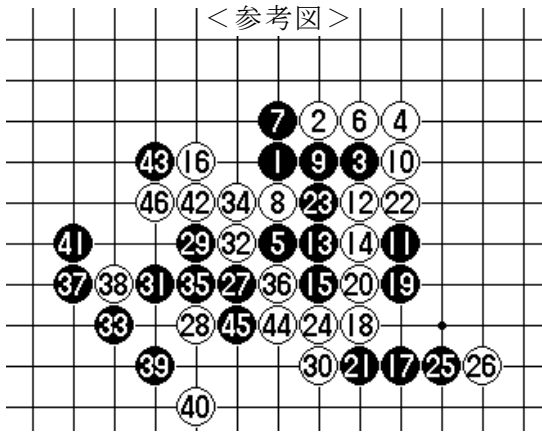
井上君は長考して白30と正着を打ってきた。「そうそう、それが絶対」と心の中でつぶやき、続いて黒31のフクミ手がうまい一手。



この手は黒A Bのフクミ手なのだが、対して白32をCと打っても、黒Dに石が入るため、E Fの四迫いが残る。つまり、この手で先手を継続している。実戦では次の手を白が間

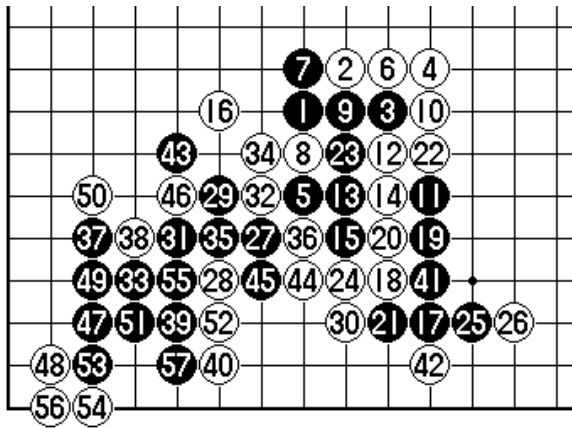
違えた。井上君も、時間に追われながら「え、まだ攻めが続くの？」という雰囲気になっっている。そこで打たれた白32は剣先を作つて防ごうという手だが、敗着となつた。さすがに私もこの手は研究していなかったが、きつと勝ちがあると信じて打ち進めた。

<参考図>



白36に石が入ると次に三々禁狙いの四迫いが残る。それを解禁しながら攻める黒39が妙手なのだが、白40

に止められた時、最初は黒41で両勝ちと思つたが、それが白42、44、46で三々禁となる。あぶないあぶない。土壇場で黒43と三を引き、三々禁をかわすとともに勝ちが見えてきた。



残り時間からかなりの時間を費やして黒47からの勝ちを確認した。黒47、49と引く筋は正着の防ぎでも出てくる筋で、盤端が近い

時によくある手筋でもある。黒49の時点で上下に勝ちが残つた。白50は四迫いを防ぐ手だが、黒51と引いて以下盤端ぎりぎりの四迫いとなる。

終局後、井上君が「いや、研究にハマつた」とこぼしていたが、研究通りに勝てることはめつたにないの嬉しい勝ちとなつた。白は32で46と防ぐのが絶対で、その後左辺から上辺に展開し、右辺の白模様を消して満局模様となる。その途中で難しい絶対止めがあり、研究なしでは防ぐのは無理だろう。元々が中国の作戦か汪さん独自の作戦かは不明だが、中国ではこういう作戦がゴロゴロあるのだろう。それにしても目の付けどころが良い。こういう盤端関係が絡む作戦は昔なら中村名人が得意としていたのだが、今は中国勢がこういう発見をしてくると思うと怖くなる。